

# 多様な対象に向けられるナーチュランスに関する研究

— 親準備期と親期に着目して —

蘆田 智 絵

(2010年10月7日受理)

A Study on Nurturance toward Various Objects  
— Focusing on mothers and young women before motherhood —

Chie Ashida

**Abstract:** The purpose of this study is to investigate how women express their nurturance as some action in a given situation, setting various kinds of nurturance objects. A. Fogel, G. F. Melson & J. Mistry (1986) defined the concept of nurturance as fostering developmental change within the potentials of growth of the nurturance objects. Nurturant behaviors may depend on the kind of the objects: children, elderly people, sick people, injured people, disabled people, pets, and plants. With questionnaires, the author asked basic ideas of nurturance, direct assistance or staying watchful, to undergraduate female students, mothers having five year old or younger child as the first child, and mothers having fourteen year old or older child as the first child. Replies were 98, 86, and 92, respectively. The situations for nurturance in the questionnaire were broken down into urgent and non-urgent scenes with two levels of difficulty for the 7 kinds of objects. The following common traits were found in their behaviors: 1) To children, the tendency of staying watchful without rendering assistance in non-urgent situations or in non-difficult situations was strong. 2) To elderly people, sick people, injured people, and disabled people, the tendency of direct assistance was predominant, even when they seem to be able to overcome the situation. Further, this tendency 2) was strongly seen with respect to mothers with longer experiences of motherhood.

Key words: nurturance, mothers, young women before motherhood

キーワード：ナーチュランス（養護性）、母親、親準備期

## 1. 問題の所在と研究目的

子育てをストレスまたは困難であると感じる親が増加していることを受け、子育て支援の充実が一層求められている（原田，2006）。子育て支援は、親の子育て負担の軽減だけでなく、親の子育て能力を向上させ親

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：樋口 聡（主任指導教員）、土橋 寶、森 敏昭、鈴木由美子

自身が成長するような支援が課題とされている（中野，2001；柳瀬，2002；小川，2002）。さらに、子育て支援の課題として親になる前の状況についても問わなくてはならないことが指摘されている（原田，2006）。現代の母親は、親になる前に子どもと遊んだり世話をしたりした経験が少なく、子育ての方法をほとんど知らないまま、わが子を育てなくてはならないという状況にある（原田，2006）。この現状は、子育ての方法を知らないという問題だけではなく、子育てに求められる内面性の不足の問題としても指摘されている。育てる立場としての経験が少ないため、子育ての大変さ

を乗り越えるために必要な力や成熟さが不足しているという問題である（尾形，1999）。

親になる前からの育成が求められている能力として、ナーチュランス<sup>1)</sup>があげられる。ナーチュランスは、A. Fogel, G. F. Melson, J. Mistry (1986) によって提唱された。彼らによれば、ナーチュランスは対象の発達の変容を促す能力として捉えられる概念であり、子どもを育てるために必要な具体的な技術や方法ではなく、対象の発達を促す能力そのものと捉えられている。この意味で、ナーチュランスは子どもだけでなく、広く多様な対象の発達を促す能力と一般化して考えられている。日本では、A. Fogel の共同研究者である小嶋 (1989) がナーチュランスを「相手の健全な発達を促進するための共感性と技能」と定義し、その対象となり得るのは、幼い子どもにかぎらず一時的にでも援助・世話を必要としている存在一般であると提唱した。このような捉え方によって、ナーチュランスは、子どもの世話だけでなく多様な対象の発達を促す経験によって育成されていく可能性をもつ。多様な対象との経験のなかで育成されたナーチュランスは、子どもを育てる際には子どもに向けられるそれとして転移する可能性がある (A. Fogel, G. F. Melson, J. Mistry, 1986; 小嶋, 1989)。

ナーチュランスを発揮する主体については、親だけではなく、幼児期から老年期までの幅広い年齢範囲の人が想定されている (小嶋, 2001)。ナーチュランスは、年下のきょうだいや友達、ペット、お年寄りとの遊びや世話など、様々な相手とのかかわりを通して、幼い頃から形成されていくと考えられている (小嶋, 1989)。

ナーチュランスには、共感性と技能が含まれる。ここでいう技能とは「相手を慈しむ育てるために有効と信じられるものを、自分の行動レパートリーの中から引き出して使おうとする」ことである (小嶋, 1989)。A. Fogel, G. F. Melson, J. Mistry (1986) によれば、対象の発達を促そうと具体的な行動として表現されるものをナーチュランス行動といい、要するに主体の内面にあるナーチュランスが外に向けて表現された具体的な形をナーチュランス行動と捉えることができる。向けられる対象によって表現される行動も異なる可能性がある。例えば、ナーチュランスが子どもに向けられる場合と動物に向けられる場合とでは、ナーチュランス行動は異なると想定される。

多様な対象に向けられるナーチュランス行動に関する研究として、幼児、児童を調査対象とした小嶋 (1988) の研究が挙げられる。そこでは、多様な対象を想定し、年下の兄弟や友達、お年寄り、身近な病人・怪我人・

障害のある人、疲れている親、ペットなどの動物や育てている植物に対するナーチュランス行動の頻度を調査した。その結果、幼稚園・保育園年中組から、小学2年生、小学5年生へと学年が進むにつれ、弟妹や年少の子どもの世話と一緒に遊ぶことは減少すること、またお年寄りや話すことや遊ぶことは減少するが、お年寄りや身近な病人・怪我人・障害のある人の世話は、統計的には有意ではないものやや増加すること、動物や植物の世話は増加することが明らかになった。このことが示唆する点は、ナーチュランス行動はナーチュランスを発揮する主体の時期 (年齢) によって、またナーチュランスが向けられる対象によって、違った形態で発現する可能性である。したがってナーチュランスが、どのような機序によって後に親として子どもに向けられるそれへと結びつくのかを解明するために、ナーチュランスの主体の時期 (年齢) やナーチュランスが向けられる対象による違いについて検討する必要があると思われる。小嶋 (1988) では幼児期・児童期が調査対象であったが、本研究ではナーチュランスの主体について青年から親まで時期を抜けてナーチュランス行動を明らかにすることを課題とする。

ナーチュランスの主体が青年 (親になる前の大学生) や親である先行研究では、養護性尺度 (小嶋, 1991) が用いられてきた (中西・粟津, 1996; 山内・松尾, 2001; 岩治, 2009; 棚澤・福本・岩立, 2009)。この養護性尺度の内容は、子どもに関する内容として「赤ちゃん、子どもへの興味」、「子どもをうまく扱える自信」、「積極的な養護的役割の受容」、子ども以外の対象に関する内容として、「福祉活動への関心」、「動物への関心」、「植物への関心」などから構成されており、これらはナーチュランスの共感性の側面に相当すると考えられる。技能の側面に関係するものとしてひとつだけ「子どもをうまく扱える自信」があるが、多様な対象に対するものでもなく、行動として問われてはいない。つまり養護性尺度では、ナーチュランスの実践であるナーチュランス行動については扱われていない。

ナーチュランス行動は、小嶋 (1988) 以降、慰め、援助、分与などの向社会的行動と類似していると想定はされてきた (小嶋, 1989; 2001)。しかし、青年や親についてどのような対象に対してどのような行動として発揮されるのか、具体的なナーチュランス行動については明確にされていない。ナーチュランス形成の機序を解明するためには、他者が観察でき、また意見聴取可能な青年や親のナーチュランス行動が対象によってどう異なるのか、子どもに対する場合とそれ以外の対象の場合との違いなどの検討が有効であると考え

えられる。

以上から、本研究では親準備期（大学生女子）と親期（母親）のナーチュランス行動について対象による違いを明らかにすることを目的とする。そのために、まずナーチュランス行動が具体的にどのような状況で、どのような行動として発現するのかを予備調査によって明らかにし、親準備期と親期を調査対象としたナーチュランス行動に関する質問紙を作成する。次に作成した質問紙を用いて、ナーチュランス行動の対象による違いについて本調査を実施した。

ナーチュランスの育成は男女ともに重要な課題であるが、父親と母親のナーチュランスは質的に異なると指摘されている。（山内・松尾，2001）そこで、父親と母親とを区別して考え、本研究では母親に着目する。このため親になる前の青年については大学生女子を調査対象とした。また、山内・松尾（2001）では第1子が3歳未満の母親と、第1子が3歳から6歳未満の母親、第1子が6歳以上の母親で養護性尺度を用いて比較を行ったが、親としての時期の違いによる有意な差はみられなかった。このことから、さらに親としての期間が長い親についても調査対象とすることで、親としての時期によるナーチュランス行動の違いが見いだせる可能性もある。そこで、大学生女子を親準備期、第1子が5歳以下の母親を親期Ⅰ、第1子が14歳以上の母親を親期Ⅱとして3つの時期について調査する。

## 2. ナーチュランス行動に関する質問紙の作成（予備調査）

### 2.1 目的

親準備期と親期を調査対象としたナーチュランス行動に関する質問紙を作成するため、ナーチュランス行動が発現すると考えられる具体的な状況と、具体的なナーチュランス行動場面を明らかにすることを目的とする。

その際、小嶋（1989；2001）がナーチュランス行動と類似しているとされる向社会的行動を参考にし、ナーチュランス行動が発現すると考えられる状況の緊急性（対象に対してどの程度緊急に手助けする必要があるか）と困窮度（対象がどの程度困っているか）の統制を行う。向社会的行動の発現は、緊急事態であるかどうか、相手の困窮度が高いかどうかなど、緊急性と困窮度に影響を受けるとされる（N. アイゼンバーク，2001）。このことから、ナーチュランス行動も緊急性や困窮度に影響を受ける可能性がある。したがって、ナーチュランス行動の対象による違いを検討するため

には、ナーチュランス行動が発現すると考えられる状況の緊急性や困窮度が、対象間で同程度になるよう統制する必要があると考えられる。そこで、緊急性と困窮度を統制した状況を各対象に対して作成し、対象によるナーチュランス行動の違いを検討する。具体的には、緊急性の高低と困窮度の高低とを組み合わせ、4状況（Ⅰ緊急性が高く困窮度が高い状況、Ⅱ緊急性が高く困窮度が低い状況、Ⅲ緊急性が低く困窮度が高い状況、Ⅳ緊急性が低く困窮度が低い状況）を作成する。

ナーチュランスが向けられる対象は、小嶋（1988）に基づき、7対象（子ども・高齢の人・けがをした人・病気の人・障がいのある人・動物・植物、以下7対象と記す）とする。

### 2.2 方法

**調査対象者** 小学校1年生または6年生の母親136名、大学生女子82名（平均年齢20.99歳）計218名

#### 調査内容

①7対象に向けられるナーチュランス行動が発現する状況の緊急性評定

複数の大学院生の協力のもとで、ナーチュランス行動が発現すると考えられ、そして7対象共通に想定できる場面（例えば「幼い子どもが転びそうです」「幼い子どもが弱っています」など）を作成した。作成した場面についてそれぞれ困窮度が高い場合と低い場合を設定した。具体的には、各場面の文章に続けて次のような文章を記述した。困窮度が高くて、対象が人物・動物のときは「その〇〇は、自分で何とかすることは無理そうです」、植物のときは「自然に何とかすることはなさそうです」と記述した。困窮度が低くて、対象が人物・動物のときは「その〇〇は、時間をかければ自分で何とかすることもできそうです」、植物のときは、「時間がたてば自然に何とかかなりそうです」と記述した。

各場面の困窮度が高い場合と低い場合について、7対象それぞれの緊急性の程度の評価を調査対象者に求めた。具体的には、「全く緊急でない状況（1点）」「やや緊急な状況（2点）」「かなり緊急な状況（3点）」「すぐに手助けが必要な非常に緊急な状況（4点）」の4件法で回答してもらった。

②ナーチュランス行動の分類

ナーチュランス行動が発現すると考えられる場面はどのような場面か、そしてそのときどのような行動をとるか自由記述で回答してもらった。具体的には、例えば子どもについての場合、まずナーチュランスについて次のように説明した。「幼い子どもが養護を必要とする状況について、お聞きします。「養護」とは、相手を手助けすることなどをとおして、その相手を慈

しむことや育てることとします」ここでは、ナーチュランスという言葉は分かりにくい可能性があるため、代わりに養護を用いた。次に、「今あなたの目の前で、幼い子どもがとても困った状態になっています。その子どもは、自分で何とかすることは無理そうです」と提示した。これに対し「あなたはこのような状況について具体的にどのような状況を思い浮かべますか。あなたなら、その幼い子どもに対してどうすると思いますか」と質問した。

### ③対象との親密度によるナーチュランス行動の違い

ナーチュランス行動は相手とどの程度親しい関係にあるかという親密度が影響する可能性もある。そのため、上記②で回答してもらった行動が、相手との親密度（知っている人の場合と知らない人の場合）によって同じか違うかを選択してもらい、違う場合にはその行動を自由記述で回答してもらった。

**手続き** 2009年12月から2010年1月に実施した。大学生には集合調査法を、母親には留置調査法を用いた。

## 2.3 結果

### ①ナーチュランス行動が発現する状況の緊急性評定と質問紙で用いる状況の決定

各場面の困窮度が高い場合と低い場合に対し、7対象それぞれの緊急性程度の評定値について平均値を算出した。対象ごとに平均評定値の高い順に並びかえ、緊急性程度の平均評定値が3以上のものを緊急性が高い場面、2以下のものを緊急性が低い場面とした。また、困窮度によって緊急性に差がないようにするため、同一場面の困窮度が高い場合と低い場合とで同様の緊急性となっているか $t$ 検定により確認し、有意差のない場面を抽出した。抽出された場面のなかから、出来るだけ対象間で同じ場面になるものを選んだ。以上より、それぞれの対象について、緊急性が高い場面と低い場面を1つずつ選び、4状況を設定することが出来た。

### ②ナーチュランス行動の分類

前述のように、ナーチュランス行動は、向社会的行動のうち援助行動、慰め、分与行動と重なる概念であると小嶋（1989；2001）が提唱している。これに基づき、自由記述の回答を援助行動、慰め、分与行動の3種類に分類することを試みた。その結果、分与行動に当てはまる回答はなく、援助行動と慰めに該当する回答をのぞいた残りは、どれにも当てはまらないその他として分類した。援助行動に当てはまる回答は、「すぐに助け起こし、ケガの手当てをする」など92.1%であった。慰めに当てはまる回答は「痛いねと共感する」など0.5%で、ごく少数であった。その他の回答は7.4%あり、これらについて検討した結果、「出来るまで待つ」

「自分でするという場合は見守る」など、すぐには助けずその対象本人が自分で出来るように見守っておく、という回答が多く見られた。

この結果から、援助行動に当てはまる行動をすぐにその状況での問題を解決し援助しようとする「即時援助行動」とし、その他に当てはまる行動をすぐには助けず自分の力で解決出来るように見守ろうとする「自立促進行動」として、質問紙を作成することとした。

### ③対象との親密度によるナーチュランス行動の違い

知らない人の場合は、身近な人の場合と比べて、同じようにかかわるという回答は44%、かかわり方が違うという回答は56%であった。小嶋（2001）でもナーチュランスは身近な人との関係でより発揮されるとされる。このような違いをふまえて、本調査の質問紙では対象との関係を身近な人に限定することとした。

## 2.4 質問紙の作成

結果の①から選定された場面を、7対象それぞれの4状況（Ⅰ緊急性が高く困窮度が高い状況、Ⅱ緊急性が高く困窮度が低い状況、Ⅲ緊急性が低く困窮度が高い状況、Ⅳ緊急性が低く困窮度が低い状況）とした。例えば、子どもに対する場面については、緊急性が高く困窮度が高い状況Ⅰでは「幼い子どもが、倒れています。その子どもは、自分で何とかすることは無理そうです」、緊急性が高く困窮度が低い状況Ⅱでは「幼い子どもが、倒れています。その子どもは時間をかければ自分で何とかすることもできそうです」、緊急性が低く困窮度が高い状況Ⅲでは、「幼い子どもが、うまく食べることができません。その子どもは自分で何とかすることは無理そうです」、緊急性が低く困窮度が高い状況Ⅳでは、「幼い子どもが、うまく食べることができません。その子どもは時間をかければ自分で何とかすることもできそうです」であった。

結果の②から、ナーチュランス行動として即時援助行動「あなたは、その〇〇をすぐに助けると思いますか」と、自立促進行動「あなたはその〇〇が自分で何とかできるまで見守ると思いますか」を設定した。

結果の③から、質問文中の対象との関係を身近な人に限定するため、「質問に出てくる人物や動物、植物は、あなたにとって身近な人物、動物、植物であると想定してください」と記述することにした。

## 3. ナーチュランス行動の対象による違いに関する質問紙調査(本調査)

### 3.1 目的

予備調査で作成した、7対象に対して4状況下で即時援助行動と自立促進行動がどの程度発現するかを問

う質問紙を用いて調査を行い、ナーチュランス行動の対象による違いを明らかにすることを目的とする。

### 3.2 方法

**調査対象者** 親準備期（大学生女子：平均年齢20.30歳）98名、親期Ⅰ（第1子に5歳以下の子どもをもつ母親）86名、親期Ⅱ（第1子に14歳以上の子どもをもつ母親）92名

#### 調査内容

- 7対象に向けられるナーチュランス行動に関する質問：予備調査によって選定された、7対象それぞれの4状況について、ナーチュランス行動（即時援助行動・自立促進行動）をどれくらいすると思うか尋ねた。「とてもそう思う（4点）」「ややそう思う（3点）」「あまりそう思わない（2点）」「全くそう思わない（1点）」の4件法で回答を求めた。
- フェイスシート：親の年代、第1子の年齢を記述回答してもらった。

**手続き** 質問紙調査法を採用した。大学生女子に対する調査は集団調査法を採用し、母親に対する調査は留置調査法を採用した。調査の所用時間は、10分～20分程度であった。調査時期は、2010年5月であった。

### 3.3 結果

親準備期、親期Ⅰ、親期Ⅱそれぞれの時期について、4状況下での即時援助得点と自立促進得点の平均値について、対象間によって差異があるかを調べるため、7対象間の1要因分散分析を行った（表1、表2、表3）<sup>2)</sup>。

そして有意差がみられた場合にはライアン法による多重比較を行った。各状況下での即時援助得点と自立促進得点をあわせてみることで、ナーチュランス行動の対象による違いを検討した。

#### 3.3.1 親準備期

親準備期では、状況Ⅰの自立促進得点以外は、すべて対象間で有意な差が認められた。

##### Ⅰ. 緊急性高×困窮度高の状況（表1、状況Ⅰ）

即時援助得点については、人物（子ども・高齢の人・けがをした人・病気の人・障がいのある人、以下、人物と記す）は、動物や植物より得点が高かった。自立促進得点に対象間での違いはみられなかった。また自立促進得点はどの対象についても低い値であった。つまり状況Ⅰでは、人物に対してすぐに助ける傾向がみられ、どの対象に対しても見守る傾向はみられなかった。

##### Ⅱ. 緊急性高×困窮度低の状況（表1、状況Ⅱ）

即時援助得点については、人物は動物や植物より得点が高かった。人物の中でも、病気の人・高齢の人は、障がいのある人より得点有意に高かった。自立促進得点については、人物の中で、子どもと障がいのある人に対しては、高齢の人・けがをした人・病気の人より見守る傾向があった。

つまり、人物に対して動物・植物より助ける傾向がある。人物のなかでも、高齢の人・けがをした人・病気の人に対しては助ける傾向が強く、障がいのある人と子どもに対しては助ける傾向も見守る傾向もあるこ

表1 親準備期の4状況における即時援助得点・自立促進得点と分散分析結果

		1	2	3	4	5	6	7	F	多重比較の結果(α=.05)
		子ども	高齢	けが	病気	障がい	動物	植物		
状況Ⅰ	援助	3.74	3.60	3.48	3.62	3.62	3.21	2.79	34.19**	1・2・3・4・5>6>7, 1>3,
緊急:高	SD	(0.52)	(0.51)	(0.58)	(0.54)	(0.54)	(0.75)	(0.96)		
困窮:高	自立	2.00	1.98	2.01	1.93	2.20	2.12	2.12	2.11	n.s.
	SD	(1.01)	(0.86)	(0.87)	(0.88)	(0.86)	(0.89)	(1.02)		
状況Ⅱ	援助	2.81	2.87	2.82	2.91	2.64	2.37	2.04	23.38**	1・2・3・4・5>6>7, 2・4>5,
緊急:高	SD	(0.74)	(0.68)	(0.74)	(0.70)	(0.76)	(0.87)	(0.86)		
困窮:低	自立	2.87	2.61	2.53	2.39	2.87	2.76	2.71	6.35**	1・5・6・7>4, 2>4,
	SD	(0.83)	(0.75)	(0.80)	(0.87)	(0.78)	(0.80)	(0.98)		
状況Ⅲ	援助	2.82	3.19	3.27	3.15	3.13	2.68	2.37	23.39**	2・3・4・5>1・6>7
緊急:低	SD	(0.75)	(0.62)	(0.65)	(0.62)	(0.64)	(0.94)	(1.06)		
困窮:高	自立	2.69	2.27	2.30	2.34	2.39	2.20	2.26	5.23**	1>2・3・4・5・6・7
	SD	(0.82)	(0.84)	(0.72)	(0.70)	(0.71)	(0.87)	(1.00)		
状況Ⅳ	援助	1.90	2.46	2.38	2.34	2.22	2.03	1.73	17.21**	2>5, 2・3・4>1・6, 2・3・4>7,
緊急:低	SD	(0.71)	(0.66)	(0.68)	(0.61)	(0.62)	(0.83)	(0.79)		
困窮:低	自立	3.33	2.78	2.98	2.93	3.08	2.59	2.69	13.99**	3・4・5>1・6, 3・4・5>7, 6>7
	SD	(0.67)	(0.67)	(0.75)	(0.68)	(0.71)	(0.91)	(1.03)		

\*<.05 \*\*<.01

とも窺える。

### Ⅲ. 緊急性低×困窮度高の状況 (表1, 状況Ⅲ)

即時援助得点について、高齢の人・けがをした人・病気の人・障がいのある人は子ども・動物・植物よりも得点が高かった。自立促進得点について、子どもはそれ以外の対象よりも得点が有意に高かった。つまり、子ども以外の人物(高齢の人・けがをした人・病気の人・障がいのある人、以下子ども以外の人物と記す)に対しては、すぐに助ける傾向が強い。子どもに対しては、他のどの対象よりも見守る傾向があるが、即時援助得点も同程度であるため、助ける傾向も見守る傾向もあることが窺える。

### Ⅳ. 緊急性低×困窮度低の状況 (表1, 状況Ⅳ)

即時援助得点について、子ども以外の人物は、子ども・動物・植物より得点が高かった。自立促進得点については、子どもに対しては他のどの対象よりも得点が高く、障がいのある人・けがをした人・病気の人・動物・植物より得点が高かった。ただし即時援助得点は自立促進得点より低かった。つまり、子どもに対しては、他のどの対象よりすぐに助けず見守る傾向があること、子ども以外の人物は子ども・動物・植物よりすぐに助ける傾向があった。

### Ⅴ. 親準備期におけるナーチュランス行動の特徴

以上から、親準備期について以下の4点の特徴がみられる。

①人物に対しては、緊急性が高く困窮度も高いとき(状況Ⅰ)は、すぐ助ける傾向があり見守る傾向は低い。

②子どもに対しては緊急性が低い状況では困窮度の高低にかかわらず(状況ⅢとⅣ)、他のどの対象よりも見守る傾向がある。

③子ども以外の人物に対して、緊急性が低くても困窮度が高ければ(状況Ⅲ)助ける傾向がある。

④動物・植物に対しては、どの状況でも人物ほどにはすぐに助ける傾向はみられない。とくに緊急性が低い場合(状況Ⅲ, Ⅳ)、即時援助、自立促進いずれについても関心が低いことが分かった。

### 3.3.2 親期Ⅰ

親期Ⅰでは、すべての状況の即時援助得点と自立促進得点に対象間で有意な差が認められた。

#### Ⅰ. 緊急性高×困窮度高の状況 (表2, 状況Ⅰ)

即時援助得点について、人物は動物・植物より得点が高く、とくに子どもは、他のどの対象よりも得点が有意に高かった。自立促進得点について、植物は、子ども・けがをした人・病気の人・動物より得点が高く、障がいのある人は、子ども・病気の人より得点が高く高かった。しかし得点自体が低い値であった。つまり状況Ⅰでは、人物に対してはすぐに助ける傾向があることが示された。とくに子どもに対しては、他のどの対象よりもすぐに助ける傾向がある。

#### Ⅱ. 緊急性高×困窮度低の状況 (表2, 状況Ⅱ)

即時援助得点について、人物の方が動物・植物よりも得点が有意に高いこと、人物の中でも病気の人・子ども・高齢の人・障がいのある人より得点が高く高いたことが示された。自立促進得点について、動物・植

表2 親期Ⅰの4状況における即時援助得点・自立促進得点と分散分析結果

		1	2	3	4	5	6	7	F	多重比較の結果(α=.05)
		子ども	高齢	けが	病気	障がい	動物	植物		
状況Ⅰ	援助	3.87	3.69	3.72	3.72	3.67	3.29	3.24	19.81**	1>2・3・4・5>6・7
	緊急:高	SD (0.43)	(0.51)	(0.50)	(0.57)	(0.56)	(0.84)	(0.73)		
	困窮:高	自立	1.79	1.94	1.86	1.80	2.03	1.92	3.56**	7>1・3・4・6, 5>1・4
		SD (1.02)	(0.87)	(0.90)	(0.88)	(0.86)	(0.84)	(0.78)		
状況Ⅱ	援助	2.83	2.83	2.97	3.05	2.83	2.22	2.31	21.88**	4>1・2・5>6・7, 1・2・3・5>6・7
	緊急:高	SD (0.94)	(0.81)	(0.83)	(0.81)	(0.77)	(0.93)	(0.83)		
	困窮:低	自立	2.65	2.59	2.38	2.28	2.72	2.84	8.47**	6・7・1・5>3・4, 1・2・5>3・4, 6・7>2
		SD (1.07)	(0.87)	(0.90)	(0.88)	(0.93)	(0.94)	(0.81)		
状況Ⅲ	援助	2.92	3.35	3.40	3.51	3.37	3.08	3.14	9.27**	2・3・4・5>6・7, 2・3・4・5>1, 7>1
	緊急:低	SD (0.83)	(0.66)	(0.64)	(0.61)	(0.69)	(0.88)	(0.80)		
	困窮:高	自立	2.72	2.23	2.17	2.14	2.13	2.28	8.37**	1>2・3・4・5・6・7
		SD (0.92)	(0.88)	(0.79)	(0.87)	(0.88)	(0.90)	(0.87)		
状況Ⅳ	援助	1.95	2.48	2.51	2.55	2.44	2.33	2.28	8.69**	2・3・4・5>1, 5・6・7>1, 4>6・7, 2・3>7
	緊急:低	SD (0.67)	(0.81)	(0.78)	(0.84)	(0.79)	(0.91)	(0.92)		
	困窮:低	自立	3.29	2.86	2.79	2.73	2.98	2.83	8.07**	1>2・3・5・6, 1>5>4・7
		SD (0.70)	(0.77)	(0.83)	(0.85)	(0.74)	(0.83)	(0.96)		

\*<.05 \*\*<.01

物・障がいのある人・子どもは、けがをした人・病気の人より有意に高く、動物・植物は高齢の人より得点が有意に高く、高齢の人はけがをした人・病気の人より得点が有意に高かった。

つまり状況Ⅱでは、人物に対して動物・植物よりも助ける傾向がある。人物の中では、病気の人・けがをした人に対して助ける傾向が強い。子どもと障がいのある人には助ける傾向も見守る傾向もあり、動物・植物には見守る傾向がみられた。

### Ⅲ. 緊急性低×困窮度高の状況（表2，状況Ⅲ）

即時援助得点について、子ども以外の人物の方が、植物・動物・子どもより得点が有意に高く、植物は子どもより得点が有意に高かった。自立促進得点について、子どもは他のどの対象よりも得点が有意に高かった。つまり状況Ⅲでは、子どもに対しては、他のどの対象よりも見守る傾向があるが、即時援助得点も同程度であるため、助ける傾向も見守る傾向もあることが窺える。これは親準備期と同じ傾向であった。子ども以外の人物に対しては、すぐに助ける傾向が強い。動物・植物に対しては、即時援助得点は子ども以外の人物より低い助ける傾向がみられる。

### Ⅳ. 緊急性低×困窮度低の状況（表2，状況Ⅳ）

即時援助得点について、子ども以外の人物は、植物・子どもより得点が高く、病気の人や動物より得点が有意に高く、動物・植物は子どもより得点は有意に高かった。自立促進得点について、子どもは、障がいのある人・高齢の人・動物・けがをした人・病気の人・植物より得点が有意に高く、障がいのある人は病気の人・植物より有意に高かった。ただし、即時援助得点はどの対象でも自立促進得点より値が低かった。

このことから、状況Ⅳでは、子どもに対しては他のどの対象よりもすぐに助けずに見守る傾向があることが示された。障がいのある人に対しては病気の人・植物よりは見守る傾向があることが示された。動物・植物に対しては他の対象と比べて、すぐに助ける傾向も見守る傾向もみられなかった。

### Ⅴ. 親期Ⅰにおけるナーチュランス行動の特徴

以上から、親期Ⅰについて以下の4点の特徴がみられる。

①人物に対しては、緊急性が高く困窮度も高いとき（状況Ⅰ）は、すぐ助ける傾向があり、見守る傾向は低い。子どもに対してはとくにすぐに助ける傾向が強かった。

②子どもに対しては、緊急性が低い状況（状況ⅢとⅣ）では、困窮度の高低にかかわらず他のどの対象よりも見守る傾向がある。

③子ども以外の人物に対しては、緊急性が低くても困

窮度が高い状況（状況Ⅲ）では、すぐに助ける傾向があり見守る傾向はあまりみられない。

④動物・植物に対しては、全体的に人物より得点は低い、困窮度が高い状況で（状況ⅠとⅢ）助ける傾向があった。

### 3.3.3 親期Ⅱ

親期Ⅱでは、状況Ⅰの自立促進得点以外はすべて対象間で有意な差が認められた。

#### Ⅰ. 緊急性高×困窮度高の状況（表3，状況Ⅰ）

即時援助得点について、人物は、植物・動物より得点が高く、植物は動物よりも得点が高かった。自立促進得点は、有意な差はみられなかった。自立促進得点はどの対象も値が低いことから、状況Ⅰで見守る傾向はみられない。つまり状況Ⅰでは、人物は、動物・植物よりもすぐに助ける傾向が強いことが示された。

#### Ⅱ. 緊急性高×困窮度低の状況（表3，状況Ⅱ）

即時援助得点について、人物は動物・植物よりも得点が高く、人物の中でも、病気の人、子ども・高齢の人・障がいのある人より得点が高く、けがをした人は、子ども・障がいのある人よりも得点が高かった。自立促進得点について、子ども・障がいのある人・植物は、動物・高齢の人・けがをした人・病気の人より得点が有意に高かった。

つまり状況Ⅱでは、人物に対しては、動物・植物に対してより助ける傾向があること、人物の中でも病気の人とけがをした人に対して助ける傾向が強いこと、子ども・障がいのある人に対しては、助ける傾向も見守る傾向もみられること、動物・植物に対しては人物より助ける傾向はみられないことが明らかになった。

#### Ⅲ. 緊急性低×困窮度高の状況（表3，状況Ⅲ）

即時援助得点について、子ども以外の人物は、子ども・動物・植物より得点が高く、植物は、子ども・動物よりも得点が高かった。自立促進得点について、子どもは、他のどの対象よりも得点が高く、動物は、けがをした人、病気の人より得点が高かった。

つまり状況Ⅲでは、子どもに対しては、他のどの対象よりも見守る傾向があるが、即時援助得点も同程度であるため、助ける傾向も見守る傾向もあることが窺える。子ども以外の人物に対してはすぐに助ける傾向が強い。これは親準備期・親期Ⅰと共通した傾向である。動物・植物に対しては、即時援助得点は子ども以外の人物よりは低い助ける傾向がある。これは親期Ⅰと同様の傾向であった。

#### Ⅳ. 緊急性低×困窮度低の状況（表3，状況Ⅳ）

即時援助得点について、けがをした人・病気の人、植物・動物・子どもより得点が高く、高齢の人・障がいのある人は、動物・子どもよりも得点が高く、植物・

表3 親期Ⅱの4状況における即時援助得点・自立促進得点と分散分析結果

		1	2	3	4	5	6	7	F	多重比較の結果(α=.05)
		子ども	高齢	けが	病気	障がい	動物	植物		
状況Ⅰ	援助	3.76	3.73	3.76	3.86	3.74	3.22	3.52	17.81**	1・2・3・4・5>7>6
緊急:高	SD	(0.50)	(0.54)	(0.48)	(0.38)	(0.55)	(0.86)	(0.69)		
困窮:高	自立	1.93	1.96	1.88	1.86	1.91	2.10	2.01	1.78	n.s.
	SD	(1.04)	(0.88)	(0.95)	(0.96)	(0.97)	(0.93)	(0.92)		
状況Ⅱ	援助	2.78	2.96	3.13	3.14	2.79	2.59	2.51	14.22**	3・4>1・5>6・7, 4>2, 2>6・7
緊急:高	SD	(0.85)	(0.80)	(0.79)	(0.74)	(0.79)	(0.81)	(0.79)		
困窮:低	自立	2.77	2.47	2.39	2.32	2.76	2.50	2.71	6.79**	1・5・7>2・3・4・6
	SD	(0.96)	(0.92)	(0.93)	(0.92)	(0.92)	(0.91)	(0.88)		
状況Ⅲ	援助	2.97	3.51	3.55	3.52	3.50	3.08	3.28	14.00**	2・3・4・5>7>1・6
緊急:低	SD	(0.80)	(0.65)	(0.64)	(0.62)	(0.60)	(0.90)	(0.79)		
困窮:高	自立	2.65	2.28	2.12	2.12	2.18	2.33	2.18	7.38**	1>2・5・6・7, 1>6>3・4
	SD	(0.94)	(0.93)	(0.90)	(0.85)	(0.86)	(1.01)	(0.94)		
状況Ⅳ	援助	2.02	2.64	2.71	2.66	2.60	2.35	2.47	12.97**	3・4>6・7>1, 2・5>6>1
緊急:低	SD	(0.74)	(0.70)	(0.73)	(0.79)	(0.77)	(0.93)	(0.84)		
困窮:低	自立	3.25	2.74	2.71	2.72	2.85	2.67	2.68	8.88**	1>2・3・4・5・6・7
	SD	(0.81)	(0.81)	(0.88)	(0.88)	(0.84)	(0.98)	(0.85)		

\*<.05 \*\*<.01

動物は、子どもより得点が高かった。自立促進得点について、子どもは、他のどの対象よりも高かった。つまり状況Ⅳでは、子どもに対しては他のどの対象よりも、すぐに助けずに見守る傾向があることがある。子ども以外の人物に対しては助ける傾向も見守る傾向もあり、動物に対しては見守る傾向がある。

#### V. 親期Ⅱにおけるナーチュランス行動の特徴

以上から、親期Ⅱについて以下の4点の特徴がみられる。

- ①人物に対しては、緊急性が高く困窮度も高いとき(状況Ⅰ)は、すぐ助ける傾向があり、見守る傾向はない。
- ②子どもに対しては緊急性が低いとき(状況ⅢとⅣ)は、困窮度の高低にかかわらず、他のどの対象よりも見守る傾向がある。
- ③子ども以外の人物に対して、緊急性が低くても困窮度が高ければ(状況Ⅲ)、すぐに助ける傾向がみられた。
- ④動物・植物に対しては、全体的に人物と比べて即時援助得点が低いが、困窮度が高い状況(状況ⅠとⅢ)で助ける傾向があった。

## 4. 考察

まず、ナーチュランス行動が対象によってどのように違うかについて、1) 子どもに対する場合、2) 子ども以外の人物に対する場合、3) 動物と植物に対する場合に分けて考察を行う。次に、親準備期、親期Ⅰ、親期Ⅱの時期によるナーチュランス行動の相違について

考察を行う。最後に、ナーチュランス行動の特徴と、今後の課題について述べる。

#### 4.1 ナーチュランス行動の対象による相違

ここに示す特徴は、特に断らない限り親準備期、親期Ⅰ、親期Ⅱに共通したものである。

##### 1) 子どもに対する場合

緊急性が低い状況(状況ⅢとⅣ)であれば、他の対象よりも見守る傾向があることが明らかになった(各時期特徴②)。子どもに対しては、すぐに援助するだけでなく子どもが自分でできるまで見守ることは、子どもの自立を促すことに意味があると考えられる。このことは、子どもの歩行発達における援助行動は、過度にならない適切な働きかけが必要であり、危険なとき以外は出来るだけ援助せずに、子どもの発達を見守ることのできる寛容さが重要であるという白神(2008)の指摘とも合致するだろう。

##### 2) 子ども以外の人物に対する場合

子ども以外の人物の場合は、緊急性が低くても困窮度が高ければ(状況Ⅲ)すぐ助けようとする特徴がみられた(各時期特徴①および③)。けがをした人や病気の人のけがや病気の程度までは今回は統制していないが、他の対象と比較すると一時的に有能性を失っている状態であると考えられる。また、高齢の人はこれまでは出来ていたことが出来なくなり次第に元の能力が低下していく存在であると考えられる。小嶋(1988)は、相手がいま弱く、有能性を欠く状態であると認識したときに、その対象に抱く共感的・援助的態度と行

動は幼児期・児童期においてもみられると指摘した。今回の結果から親準備期や親期でも、このような存在に対して、緊急性が低くても本人が自分で出来そうにない状況であれば、援助する必要があると判断されていることが窺える。

### 3) 動物・植物に対する場合

各時期特徴④のように動物と植物に対しては、困窮度が低い状況では他の対象に比べて得点が低いのが目立った。ただ親準備期と比較して、親期では困窮度が高い場合(状況ⅠとⅢ)に助ける傾向が、他の対象と同程度に強い。

## 4.2 時期によるナーチュランス行動の相違

子どもに対しては、親準備期、親期Ⅰ、親期Ⅱを通して、即時援助得点、自立促進得点ともにほとんど差がみられなかった。今回の親準備期の調査対象者は教育学部に在籍しており、子どもの発達などについて知識があったためと思われる。

子ども以外の対象に対する状況Ⅲ、Ⅳの即時援助行動の得点が、親準備期よりも親期Ⅰ、親期Ⅱの方が高い傾向がみられた。このことから、親準備期より親期Ⅰ、親期Ⅱの方が、子ども以外の対象に対して、緊急性が低い状況でもすぐに助ける傾向があることが明らかになった。先行研究では、親になることで、親としての自覚が芽生え、子どもに対する接し方だけでなく、弱いものをいたわるようになったなどの変化があることも指摘されている(村松・新谷・牧野, 1993)。親の方が多様な対象に対してすぐに援助しようとする姿勢が強くなっていることは、親になることでの経験が影響しているものと考えられる。

## 4.3 ナーチュランス行動の特徴

1. ナーチュランス行動の対象による違いは、とくに緊急性が低い場合(状況Ⅲ、Ⅳ)に顕著である。緊急性が低い場合、子どもに対しては自立促進行動として、子ども以外の人物と動物、植物に対しては即時援助行動として発現する。

2. 親期の方が親準備期よりも子ども以外の多様な対象に対して、即時援助行動つまり助けようとする傾向が強い。

これら2点から、以下のことが理解できる。子どもに対して特徴的にみられた自立促進行動は、すぐに助けずに見守ることであり、即時援助行動とは一見対極にある行動である。将来の発達が期待される子どものために、手っ取り早く即時援助するのではなく、敢えて見守り子ども自身が出来るまで忍耐強く待つことが自立につながる。それによって、よりよく子どもの発達が促され、結局は援助することになる。このような自立促進行動は、発達を促すというナーチュランス行

動に特有の重要な側面であると考えられる。本研究の結果から、向社会的行動における援助行動、慰め、分与とは違った、ナーチュランス行動の特徴を見出すことが出来た。

また親期は、見守ることが必ずしも機能しない、子ども以外の対象に対しては直接的に助けることの重要性を理解していることが窺える。ナーチュランスの生涯発達の過程についての仮説(小嶋, 2001)では、子育て期以降ナーチュランスの対象が拡がり、一般化されていくと考えられている。今回みられた親期の特徴は、この方向につながるものであるといえる。

## 4.4 今後の課題

小嶋(1991)は「生きとし生けるものに対する慈しみと育みの心と行為」がナーチュランスの本質と述べている。動物、植物を含め、生命一般に対する姿勢の在り方を問うことは真のナーチュランスにつながることにいえる。このことから今回の対象を拡げた調査は有意義なものであったといえる。

今後の課題として次のようなことが挙げられる。本研究ではナーチュランス行動の対象による違いは明らかになったが、発達を促そうとする主体の意図がどのような内容であるのかについては調査の範囲外であった。発達を促そうとする意図があるという点が、向社会的行動とは異なるナーチュランス独自の特徴(小嶋, 1989: 2001)である。したがって、表面に現れたナーチュランス行動だけでなく、発達を促そうとする主体の意図にも着目する必要があるだろう。その上でナーチュランスとはどのようなものか、また、どのような対象とのどのような経験によってナーチュランスを育成できるのかさらに解明していく必要があると考えられる。

## 【注】

- 1) 小嶋(2001)は、「養護性」という訳ではナーチュランスの概念の適切な意味が伝わりにくいため、nurturanceのカタカナ表記であるナーチュランスと表現するよう提唱している。本研究でも小嶋(2001)にしたがう。ただし引用部分と養護性尺度(小嶋, 1991)に関しては、原文のまま養護性とした。
- 2) 表1、表2、表3では、子どもは子ども(多重比較結果の番号1)、高齢の人は高齢(同2)、けがをした人はけが(同3)、病気の人は病気(同4)、障がいのある人は障がい(同5)、動物は動物(同6)、植物は植物(同7)と表記した。

## 【引用文献】

- N. アイゼンバーグ／二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子訳『思いやりのある子どもたち—向社会的行動の発達心理』北大路書房 2001年
- Fogel, A., Melson, G. F. & Mistry, J. (1986). Conceptualizing the Determinants of Nurturance: A Reassessment of Sex Differences. In A. Fogel & G. F. Melson (Eds), *Origins of nurturance: developmental, biological and cultural perspectives on caregiving* (pp. 53-67). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 原田正文『子育ての変貌と次世代育成支援』名古屋大学出版会 2006年
- 岩治まどか「大学生における養護性の検討」『東京家政大学研究紀要』第49集第1号 2009年 133-142頁
- 小嶋秀夫『幼児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究』昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書 1988年
- 小嶋秀夫「養護性の発達とその意味」小嶋秀夫編『乳幼児の社会的世界』有斐閣選書 1989年 187-204頁
- 小嶋秀夫「親となる過程の理解」我妻亮・前原澄子編『母性の心理・社会学』医学書院 1991年 79-111頁
- 小嶋秀夫『心の育ちと文化』有斐閣 2001年
- 棚澤令子・福本俊・岩立志津夫「大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響」『教育心理学研究』第57巻 2009年 168-179頁
- 村松幹子・新谷由里子・牧野暢男「親の変化とその規定因に関する一研究」『家庭教育研究所紀要』第15巻 1993年 129-140頁
- 中西由里・栗津幹子「『養護性 (ナーチュランス)』に関する一研究—幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較」『椛山女学園大学研究論集 社会科学篇』第27号 1996年 9-18頁
- 中野由美子「親子の関係性の変貌と子育て支援の方向性」『家庭教育研究所紀要』第24巻 2001年 28-39頁
- 尾形奈美・大塚由希・吉田真弓「育児準備性に関する日米比較研究—青年期男女の育児意識とその規定要因—」『家庭教育研究所紀要』第21号 1999年 96-105頁
- 小川博久「保育基本問題検討委員会最終報告 今日の乳幼児の危機と保育の課題」『保育学研究』第40巻第1号 2002年 160-165頁
- 白神敬介「乳児の運動発達における母親の歩行発達援助行動」『小児保健研究』第67巻第4号 2008年 573-582頁
- 山内ひろみ・松尾祐作「男性の養護性の発達に関する研究」『福岡教育大学紀要第4分冊教職科編』第50巻 2001年 247-253頁
- 柳瀬洋美「こころを育む親支援—現代の子育て不安とこころの自立—」『家庭教育研究所紀要』第25巻 2002年 19-23頁